日本山口県大島一周

日本の地中海、
瀬戸内海の輝く宝石

瀬戸内海は、島々に囲まれた日本の地中海である。幅 40~50 キロ、長さは 400 キロが超える。瀬戸内海の西端に位置する山口県大島は宝石のような島々に囲まれていて、海岸景観が美しく、日本屈指の自転車コースにあげられている。ここを中心に、今年 11 月 9 日、自転車ツーリングイベントである'サザンセト・ロングライド大会が開かれる。この美しい海の道をあらかじめ踏査してみた。

執筆・写真・金ビョンフン （本誌の発行人） モデル・李ユンギ(本誌旅行事業部理事)

釜関フェリーは思いの温床だ。釜山と下関を結ぶ釜関フェリーは、日帝時代には関釜連絡船'と呼ばれた。侵略と収奪の尖兵でもあったが、多くの出会いと別れが横行した国際旅客船の哀歓が、切々と染み込まれていて、 思い出でもあり、歴史でもあり、時にはロマンでもある。
月日は経って船は変わっても釜関フェリーは悲恋の恋人キムウジンとともに玄海灘に身を投げたユンシムドクの絶望が込められていて、'帰ってきてください~釜山港に(韓国の有名な歌)'の切ない絶叫も甲板のどこかでこだまする。
日本は 1905 年 1 月、京釜線列車を開通し、同年 9 月、京釜線との連係交通網で関釜連絡船を運航し始めた。関釜連絡船はその時から日本と釜山~ソウルを通って、大陸に進出する交通手段だった。解放後、しばらく航路は途切れたが、1970 年から再開され、今日に至っている。現在の関釜フェリーは韓国の船ソンヒ号と日本の船ハマユ号が隔日に交差運行している。船は大きさと構造は同じである。釜山~下関は、直線で 215 キロ。船で 11 時間程度かかる。

玄海灘は短く、穏やかだ

再び釜関フェリーに乗る。多くの観光客で賑わう釜関フェリーは 国際旅客船であるが、乗客の 7 割以上が韓国人で、ロビーの自由利用のテーブルは食事と飲酒で賑わう韓国人たちが占めている。日本人乗客はどこに隠れたのか探すのも難しい。

華麗な照明に染まった釜山港大橋を過ぎ、五六島を離れると 1 万 6 千トンの巨大なハマユ号は玄海灘の黒い水の光の上にゆっくり染み込む。

玄海灘は荒波だと聞いたが、一晩中波はとても穏やかで熟睡した。' セウォル号'の残像がまだ鮮明に残っているのに、似た形の船で熟睡できるなんて不思議だった。しかし、乗船直後、私は知らないうちに、救命胴衣や非常脱出路、救命艇縛りの状態を確認していた。

明け方、目が覚めると船窓からもう九州地域が見えた。

今回の日本行きは下関がある山口県の東、瀬戸内海に浮いている大島一帯で 11 月 9 日に開かれる'サザン瀬戸ロングライド大会のコースを踏査するためだ。日本では非競争長距離ツーリングの'ロングライド'が大流行だ。サザン瀬戸は'南の瀬戸'という意味で、大会が開かれる柳井市と大島が瀬戸内海の南端に位置するので付けられた名前だ。コースが通るいくつかの地域と機関が参加して別途の大会実行委員会を構成し、主催側を成しているが、実質的には柳井商工会議所と日本最大の旅行会社であるJTB が進行を担当する。取材チームは私と李ユンギ理事と 2 人で、JTB の依頼を受け、大会の海外マーケティングを担当している大阪所在の旅ピア旅行社の招待を受けた。旅ピアのジョンミンス社長は気さくて元気あふれる女傑タイプの在日韓国人で、会えて嬉しかった。

"まさか韓国人だとは想像もできなかったんです!"

朝 8 時、下関港に降り、旅客庁舎でしばらく待った。ジョンミンス代表がレンタカーを借りるのに時間が少しかかると事前に連絡があったからだ。ところで私たちの周辺をうろうろしてた中年の日本人の男性が少し時間が経って慎重に話しかけてきた。

"韓国の自転車雑誌社からいらっしゃった方でしょうか?山口大島取材のために…"

そうだとしたらこの方は大笑いをする。大会の実務責任者でもある JTB 旅行会社の田村秀昭局長に、説明を聞いて私も失笑した。韓国人男性二人が来ると言われて旅客庁舎をあちらこちらを歩き回りながら私たちを捜したが、どうしても李ユンギ理事の外見が欧米人に見え 30 分も他の近辺を徘徊したということだ。そうすると庁舎に残った中年男性が私たちだけになったので、もしやと思って言葉をかけたというものだっだ。

"韓国人だとは想像もできなかったです!本当に本土の韓国人ですか?"

李理事は、サングラスを脱ぎながら"はい、そうです。純粋な韓国人です。"とあいさつをするとさらに驚く様子だっだ。長い髪に ぼうぼうに生やしたひげ、欧米的な目鼻立ちの李理事といると、このようなエピソードが少なくない。国内でもたまに"ハロー!"のあいさつをもらっている。

下関から柳井までは 145 キロ。今回の大会は柳井市と大島町地域を主な舞台にして、出発とゴールイ

ン地点が柳井にあって、柳井商工会議所が事実上の主催者だ。まず、柳井に行って藤麻功商工会議所会長(現地では会頭という)に会った。親切にも彼は運営しているウエディングホールの食堂で素敵なお昼をもてなしてくれた。韓国の年で 85 歳なのに藤麻会長は非常に元気に見えた。秘訣を聞くと"眠り"と即答した。その年齢でも白いスポーツカーマツダロードスター(海外では'ミアータ'で知られている)を直接運転している。彼は"大島は海岸の景色が本当に美しい"、自転車に乗るには最高の自然条件だと自慢した。

一周 150 キロ、幻想の海の道

コースの出発点は柳井市北西の丘の上に位置した'柳井ウェルネスパーク。'我々の言い方にすれば体育公園になる。サッカー場、プール、温泉などが備えられた住民福祉施設だ。広々とした運動場は大会の定員 1800 人は十分収容することができそうだ。

コースは柳井ウェルネスパークを出発して東にしばらく内陸を経て、大島に進入し島を一周する。その次に柳井南部に突出した室津半島を回って出発地にゴールインする。距離は長いが、高さ 100m 余りの坂が 4~5 ヶ所ある程度なのでコースは全般的に無難だ。途中に 4 ヵ所の普及所が設けられて、おやつと昼食、飲料水を提供する。

出発後、東に進むが、149 番と 151 番道路を通る区間は田園風景と山間地帯が調和する内陸地方だ。度が過ぎるほど落ち着いて清潔な日本の田舎の風景を静かに鑑賞できる区間だ。代わりに 110m 程度の峠を越えなければならない。

山間地帯を過ぎると急に海が広がって絵のような大島大橋が架かっている。韓国の多島海のように瀬戸内海は多くの島々がちらばっている島々の宝庫でもある。

長さ 1020m の大島大橋を渡ればコースの白眉である大島一周が始まる。左側通行なので自動車に妨害されず、海を見やすいように時計回りに一周する。ところが、大島は名前が様々だ。本来の名前は屋代島だが、行政区域名が周防大島町なので、短く大島と呼ぶ。周防は、この地域の江戸時代名称である。後から私たちの面倒をみてくれた JTB の有田義隆課長は私が日本語は音読みと訓読みが入り混じって漢字の読むことがとても難しいと言うと、日本人である自分も地名と人名を読むのが容易ではない、特に島の名前が難しいと話した。日本は島が 7 千個もある島天国なのに、自国民も名前が読みにくいならどうなるのかと思った。ずいぶん前島に定着した原住民がつけた名前を漢字化し、ごちゃごちゃになったかもしれない。

437 番道路が通る大島北海岸は曇って時々雨まで降ったが、とても美しかった。悪天候の日にもこんなに美しいのに晴れの日は、どれほど素敵だろうか。田村局長は晴れた日はエメラルドの海も見られると話した。

島の東端にある伊保田港でコースは山になった。海抜 100m 余りの山の麓に沿って走るこの道は海岸道路とは別に'オレンジロード'と呼ばれるが、暖帯林の森がうっそうとしていて時に素敵な眺めが広がるスカイラインである。山の中を通るオレンジロードは私たちが宿泊したサンシャイン瀬戸ホテルがある片添ヶ浜海水浴場から浜辺に降りたら終わりだ。オレンジロード区間は約 10 キロ。

取材チームは雨のため北部海岸は車で回り、オレンジロードの直前から 片添ヶ浜海水浴場を通り、しばらくライディングをしてみた。主催側が用意してくれた自転車はメリダとキヤノンデールの初中級ロードバイク。私たちの背に合わせて、サイズまで配慮した細かい心づかいに驚いた。
片添ヶ浜から大島大橋まで大島の南部海岸は息を吐く暇ない絶景の連続だ。鬱陵島に比肩するほど、道は立体的で、巨大な湖のような内海に浮かんでいる島々は雲と霧は夢幻の世界を演出する。風景を鑑賞して、写真撮るのにも時間があっという間に流れてしまうので、10 時間制限時間に 150 キロ完走することもぎりぎりだ。

加耶（カヤ）と百済、朝鮮通信使の跡

これから大島西の室津半島に進入する。半島の南端には上関と言う狭い海峡が関門をなしている。この指名を見てなぜ下関（シモノセキ）がなぜ下関であるかが分かった。昔狭い海峡を関門として使いながら京都と東京が近いここが上関になって、遠いところが下関になったのだ。

この上関には、朝鮮通信使の遺跡がある。私たちにはあまり注目されていない歴史の短編だが江戸時代、日本で朝鮮通信使は大変大きな意味があった。1429 年、最初の通信使が派遣されていたが、一般的には文禄・慶長の役以後、徳川幕府との善隣関係の中で行われた通信使を言う。徳川幕府時だけでも 1607 年から 1811 年まで 200 年間、12 回通信使が派遣された。朝鮮通信使の行列は思ったよりとてつもなく規模が大きくて、一回で一行が 400~500 人に達し、これらを接待するために日本政府は、国家財政が圧迫されるほどだったという。釜山を出た朝鮮通信使は下関を通り、この上関を経て大阪に上陸、以降、東京まで陸路で移動した。通信使の往来期間だけが 6 ヵ月~1 年がかかったと言うので日本としては大きなイベントだったのだ。

上関は、朝鮮通信使がしばらく泊まって行ったところで、朝鮮通信のために客舎建物を別に建てるほど、膨大な投資をした痕跡のあるところだ。客舎の設計図を見ると、通信使の序列順にとまる場所、動線などが緻密に表記されていて、当時も日本人特有の緻密で繊細な文化があったことを垣間見ることができる。当時の客舎建物は全て消えたが、警察署の役割をした御番所の建物や石垣、客舎の敷地はまだ残っている。今は小さな漁村に過ぎない上関だが、こぢんまりとした博物館まで作って朝鮮通信使の跡を保存している。もっと驚くことは、私達を案内してくれた現地の郷土史学者だった。日本には全国的に'朝鮮通信使関係地域史研究会'という歴史研究会まで結成されている事実である。見かけは平凡な町のおじさんとおばさんみたいだけど、数百年前の朝鮮通信使の事を細かなところまで、まるで数日前に見たように詳しく生生しく説明してくれた。実に驚くべき記録と保存精神、日本の底力をここでも見た。

上関は今年の大会にはコースから外されたが、来年には韓国人参加者のために、コースに入れる計画だと田村局長は言った。

室津半島を西に北上すれば、今度は海辺には尋常ではない古墳 2 基が出てくる。白鳥古墳と神花山古墳だ。どちらも長さが 120m に達する巨大な前方後円墳だ。前方後円墳は日本特有の古墳形態で、前は角で、裏は丸い、墳丘 が一体化されている形だ。韓国にも湖南地域で一部発見された。前方後円墳は 4~7 世紀に作られたもので、規模から見て、王陵級と推定されるが、主人公が誰なのか、誰がどう作ったのかすべてがベールに包まれた日本古代史のミステリーでもある。一番大きな大阪の仁徳天皇陵は、長さが 468m に達する。ところが、仁徳天皇陵から出た環頭大刀と青銅鏡は百済・武寧王陵で出土されたものと非常に似ている。特に青銅鏡は NHK でさえ同じ鋳型で作ったと発表したほどだ。百済と古代日本の関係は既に数多く知られているが、その関係は我々の想像を超える水準だったことは明らかだ。

白鳥古墳は巨大な規模にもかかわらず、ただの里山のように森に埋もれて墳丘の形も分からないほど放置されている。しかし、出土された波形銅器と青銅鏡は加耶、百済との親密性を見せてくれる。

白鳥古墳から北に 3 キロほど離れた神花山古墳は独特に海辺の丘の上にあるが、頭蓋骨が発掘されて顔を復元し、巨大な銅像まで建てられていた。被葬者は 20 代半ばの美貌の女性で、当時、この地域を支配した首長だったのだ。前方後円墳で女性人骨が発掘されたのは非常に珍しい、それも若くて美しい女性だとは好奇心がそそられた。

ところで、この神花山古墳から 600m 離れた海辺の小さな島に驚いたことにも百済部神社があった。日本の神社は概ね南向きをしていて、神社の入り口を知らせる鳥居も南向きをするが、特にこの百済部神社は百済方向の西向きをしていた。神社で祀っている神は海を守る守護神という程度の説明のみであったが、百済渡来人を指すことではないだろうか。前方後円墳もほとんどが南北に築造されるが、神花山古墳は神社と同様に東西方向だ。瞬間的にお墓主は百済から渡ってきた王女ではないかなと思った。

神花山古墳のすぐ隣には 2 次世界大戦末期、戦勢が不利になった日本軍が最後防御策として導入した自爆攻撃戦闘機神風と類似した人間魚雷回天の訓練基地があった。今は小さな記念碑と回天の模型だけが当時を物語っていた。

神花山古墳を過ぎると南周防大橋が優雅な湾曲を描きながら湾を超える。もうゴールイン地点までは約 10 キロ。田園地帯や大小の村を過ぎると再び柳井市に進入して、150 キロの大長征が終わる。

見事な瀬戸内海の絶景はもちろん、見どころと考えさせるところが多すぎるので、一日に完走するにはとても惜しいのだ。

サザン瀬戸ロングライド www.southernseto-longride.jp